

ゼネコンと交渉進む

非破壊検査ロボ 日本展開へ

米国のスタートアップ、a Robotics Company（アカシ・カンチャール最高経営責任者〈CEO〉）が、非破壊検査ロボットの日本国内への展開に注力している。プログラミング機能を備えたセンサーを搭載し、高精度で解像度が高いデータを得られるのが特徴。下水道管の老朽化状況の診断に利用する需要があり、導入に向けてゼネコンなどと交渉中という。



アームにセンサーを搭載し、狭い地形でも柔軟に利用できる（報道発表資料から）

非破壊検査ロボット「ND Test-R」は幅0・3㍎×奥行き0・5㍎×高さ2・4㍎の機体で、重量は48キ。10時間連続稼働可能なバッテリーを備える。

車輪付きの機体からアームが伸び、アームの先のセンサーで構造物の内部欠陥や材料強度、腐食の進行度合いなどを調査する。

22日に東京都内で会見したアカシCEOによると「センサー内でソフトウェアのプログラミングを行えるのが最大の特徴」という。プログラミング機能を使って検査データを分析し、レポートも作成できる。

下水道管の老朽化診断への活用について、アカシCEOは「民間企業ではゼネコン3社とエンジニアリン

グ会社2社、複数の商社と導入に向けた交渉を進めている」と説明。ゼネコン3社のうち1社が大手5社の一つという。

今後は、ゼネコンがロボット技術開発で連携する「建設RXコンソーシアム」や、中小規模のゼネコンとも交渉していく意向を示した。国内企業とJVを組んで事業を行う可能性にも言及した。